

月影



第79号

令和六年十二月一日発行
浄土宗西山禅林寺派

常林院



息抜くことは
生き抜く力



琴の弦ことげん

張りすぎると切れ

緩めすぎると鳴らない

張りすぎず

緩めすぎず

いい加減かげんが

良い音に

心の弦も

いい加減に

開宗八五〇年

法然上人の生涯



【十六】

入 滅



四年ぶり涼へ

罪は許されたものの、

洛中への出入りは禁じられていたので、箕面の勝尾寺に滞在して入洛の許しを待つことになった法然上人。訪ねてくる人々と交流をしながら念仏生活を送られます。

一二一年ようやく入洛の許しが出て、四年ぶりに京都の地を踏まれる。九条兼実の弟であり、

青蓮院門主であった慈円の厚意により、東山大谷の住房が提供された。法然上人の身を案じながら亡くなった九条兼実の遺志を継ぐ配慮と思われる。京都へ帰った法然上人のもとには歓喜した人々が次々と訪れました。

病味に伏せる

八十歳という高齢での配流の日々の影響か、一二二年正月、法然上人は体調を崩される。

食欲が落ち、床に伏せることが多くなられる。しかし、そのような状態でもお念仏だけは止むことなく続けられ、睡眠中

でも口が動いていたほどだったという。

一枚起請文



法然上人の体調はさらに悪化し重態となった。

臨終が近い事を覚悟した弟子の源智は、法然上人に念仏の教えの要点を書き残してほしいと懇願した。すると法然上人は自ら筆をとり一枚の紙に書き記した。「一枚起請文」と呼ばれるその文章は、

法然上人の念仏の教えが簡潔に記されたものである。その一節に、「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」（念仏を学んだ人

も智者のような振る舞いをせず、ただひたすらお念仏を称えなさい）がある。

法然上人入滅

一月二十五日正午。多くの弟子たちに見守られながら、お釈迦さまと同じ頭北面西（頭を北に顔を西に向けること）の姿で静かに息を引き取られた。御年八十歳。

法然上人が浄土宗を開かれて今年で八百五十年。脈々と受け継がれてきた法然上人の教えに、今も多くの人々が救われています。「ただ一向に念仏すべし」（終わり）

永観堂だより

降誕会（ごうたんえ）

毎年十一月九日は、総本山永観堂禅林寺において、我が宗派、浄土宗西山禅林寺派の派祖、西山上人の誕生を祝う法要、降誕会が厳修されます。

西山上人は、今から約八百年前、一一七七年十一月九日にお生まれになりました。上人は久我家の一門で十四歳の時に仏門に入ることを願われ、法然上人の弟子となり、常に法然上人に仕え、念仏の教えを直々に授けら

れました。

降誕会当日は、紅葉にはまだ早く、青モミジの永観堂でお堂いっぱいの参拝者がありました。

法要では僧侶の読経、そして、永観堂幼稚園の園児たちの献灯献花、仏さまに捧げる仏歌があり、西山上人のお誕生を皆で祝いました。



彩寺記

石落（つわぶき）

境内に石落が咲いています。花が少なくなり、庭が寂しく思えるこの時期、石落の鮮やかな黄色い花は、寂しさを癒してくれます。

石落の名は、見た目から名づけられたという説があります。葉に光沢（つや）があることから「つやぶき」が訛（なま）って「つわぶき」に変化したそうです。

花言葉は「困難に負けない」。日陰でも、寒い冬でも常に緑の葉を絶やさないその姿に由来するそうです。



仏教歳時記



運び来る

僧皆若し

十夜粥

原 石鼎

お十夜とは、主に十一月に勤められる阿弥陀如来に感謝する法要のことです。

その昔、平貞国が真如堂で十日十夜参籠して念仏を称えたことに由来します。法要の際、参拜者にふるまうお粥が十夜粥。お粥の事を「おじや」と呼びますが「おじゅうや」が訛つて「おじや」になったという説があります。



雑記抄 煩惱具足

毎年、大晦日には除夜の鐘がつかれます▼除夜の鐘は人間の煩惱の数、百八回つかれます。「悩み煩わせる」と書いて煩惱。私たちには煩惱が生まれながらに具わっているのです(煩惱具足)▼阿弥陀経というお経の中に、頭が二つ、体が一つの「共命鳥(ぐみょうちゅう)」という鳥が出てきます。カルダとウバカルダという名前▼ある日、ウバカルダが寝ている時に、カルダがおいしい果物を食べました。体は一つなのでウバカルダにとって、自

分だけ食べて寝てしまいます▼入れ替わるようにウバカルダが起きました。そして果物の食べたあとを見つけたウバカルダはこう思いました。「私も食べたかった」「なぜ起こしてくれなかったのか」と▼食べたかったという貪りの心は日が経つにつれ大きくなり、怒りへ変わっていきます。そしてカルダを道づれに死んで、仕返ししようと毒を口にします。二羽は死んでしまいました▼貪りの心。怒りの心。愚かな考え。この三つを煩惱の三毒といえます。私たちも皆、三毒を持っているのです。